The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢者のコミュニケーションに関する一考察 : 日本の高齢女性の会話データをもとに
Author(s)	梅本, 仁美
Citation	大阪大学言語文化学. 2008, 17, p. 197-212
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高齢者のコミュニケーションに関する一考察

—日本の高齢女性の会話データをもとに—*

梅本 仁美**

キーワード：関わりあい、協力的な会話スタイル、グループアイデンティティー

The purpose of this paper is to investigate how elderly women over 70 years of age in Japan interact with friends of the same sex in informal situations. My objective in analyzing their actual conversations is to gain knowledge of some of the particular conversational styles of the elderly women's interaction.

Since the 1970s several research studies on the communication of elderly people have been carried out in Europe and the United States. By contrast, few studies on the communication of elderly people have, unfortunately, been done in Japan (Usami 1997).

Despite this fact, elderly people in Japan are thought to be inferior in communicative competence compared to the younger generation. For instance, it is said that elderly people speak self-centered and one-sidedly without consideration for other people.

What I am concerned with here is whether elderly people are actually incompetent in communication. I would like to reveal characteristics of the interaction of elderly women in Japan by analyzing their conversations. For the analysis of their interaction, the participants were women ranging in age from 70 to 80 years. In order to collect data, I asked them to pair with a friend to enable them to behave more or less naturally in spite of the experimental situation. All the data were recorded with an IC voice recorder and transcribed.

In order to clarify the context in which the interactions occurred, a qualitative approach was chosen as the method of analysis. I used the key concepts of interactional sociolinguistics in the analysis of the data.

During the interactions some interesting findings were observed. Coates (1996) finds two phenomena characteristic of women friends' conversational speech: "jointly constructed utterances" and "overlapping speech". By using these linguistic devices, partici-

---

* A Study of the Communication of the Elderly People: Based on the Conversational Data of Elderly Women in Japan (UMEMOTO Hitomi)

** 大阪国際大学留学生別科非常勤講師

pants of this study constructed "a collaborative floor". Although elderly people are believed to be self-centered, participants of the study also used these strategies in order to produce speech collaboratively.

Furthermore, the participants considered "elderly people" to be a social group and recognized that they are members of this group. Their acceptance of the fact that they are all members of the same social group appeared to enhance their involvement with each other.

Finally, I should point out that the conversational styles of the Japanese elderly women indicate that their communicative competence is not in decline. On the contrary, they are very competent in interacting with each other and can engage in conversations collaboratively.

1 はじめに

日本は世界でも有数の長寿国として知られている。2007年9月15日に発表された総務省の推計によれば、65歳以上の高齢者の人口は2744万人に達し、その数は総人口の21.5%を占めるという。このような高齢化傾向が進んだ結果、仕事に従事している高齢者も増加し、現在ではその数は500万人を上回っている[1]。にもかかわらず、高齢者に対する否定的なステレオタイプ[2]は依然として存在し、これが高齢者とのコミュニケーションの場面においても好ましくない影響を与えていることが多い。

宇佐美（1997）によれば、アメリカをはじめとする欧米では「高齢者に対するコミュニケーション行動」に関する研究が1970年代から盛んに行われるようになり、他世代の高齢者に対する過剰な適応行動が批判的に研究されるようになってきているということである[3]。これに対して日本では、高齢者を取り巻くコミュニケーション環境の問題についてはまだあまり議論されることがなく、それに関する体系的な研究もほとんど行われていないのが現状であるという。

またこれまでにわが国で行われてきた高齢者のコミュニケーションに関する研究は、

---

[1] 総務省によれば、65歳以上の高齢者の人口、比率は共に過去最高を更新。男女別では男性1169万人、女性1575万人。女性高齢者は女性全体の24.1%を占め、女性は「4人に1人が高齢者」という状況に近づいている（2007.9.17.朝日新聞朝刊より）。

[2] 高齢者には、次のような神話があると言われている。(1) 65歳以上は年寄りである (2) 年寄りのほとんどは健康を害している (3) 年寄りの頭は若者のように明敏ではない (4) 年寄りは非生産的である (5) 年寄りは魅力がなく、セックスにも無縁である (6) 年寄りは誰も皆同じようなものである（ディヒトバルト 1992）。

[3] Ryan et.al. (1995) は心理言語学的な立場から「保護者のようなコミュニケーション」の特徴を明らかにし、「このようなコミュニケーションのあり方が、世代間のコミュニケーションギャップを助長し、若い世代の高齢者に対するステレオタイプを強化することになっている」と主張。同様の研究にCoupland,N.,J.Coupland & H.Giles (1991) がある。

医学や介護の立場からのものが主流であった。そのため、辰巳（1997）のように加齢によるコミュニケーション能力の低下が研究の焦点になっているものが多い。また言語学の分野においても、施設に暮らす高齢者に対するインタビュー（小野田 2007）や、パーティーのスピーチ（遠藤 2000）を分析している研究などが大半であり、実際の高齢者同士の会話データを実証的に研究しているものは寡聞にして知らない。

このように、これまでのわが国の研究は残念ながら実際の高齢者のコミュニケーションを記述しているとは言い難い。また、研究で明らかにされた知見が高齢者に対するステレオタイプを補強し、更なるエイジズム[4]を生み出すという皮肉な結果に陥ってしまっている場合もある。

そこで本研究においては、介護を受けずに自立して生活する高齢者の会話データを分析することにより、高齢者が実際の相互行為の場面において、互いにどのようにコミュニケーションを行っているのかを明らかにし、これまでに一般的に受け入れられてきた高齢者のコミュニケーション能力に対するステレオタイプを検証していきたいと思う。

2．理論的背景とデータ

2．1　社会グループとしての「高齢者」

あるメンバーから成る集団が一つの「社会グループ」を形成していると認知されるためには、（1）互いに近くに住むか、他と識別できる集合場所を持っている（2）他と識別できるサブカルチャーを持っている（3）そのグループの存在を認識し、そのグループに属しているということが彼らのアイデンティティーの一部になっている、という条件を満たさなければならないという（Coates 1986:7）。

この条件と照らし合わせると、「高齢者」はきわめて特殊な社会グループと言えるだろう。まず一口に「高齢者」と言っても、その定義はあいまいである。老人福祉法の第2章においては、福祉の措置の対象年齢が65歳以上となっている。一方、老人保健法では、後期高齢者医療制度の施行により、医療費の給付対象者を75歳以上とした。このように法律上においても統一された区分がされていない。また介護施設に居住していない自立した高齢者の場合には、子世代、孫世代と同居する場合でも、1人暮らしや夫婦2人暮らしの場合においても、日常的に他世代と同一地域に居住し、多かれ少なかれ交流を持っている。また、若い世代と高齢者とは明確に二項対立するグループではなく、年齢が連続している。

それにもかかわらず、高齢者の中には自分自身を同世代の他の人よりも若くて健康で

---

[4] ある年齢集団に対する否定的ないし肯定的偏見もしくは差別を言う（バルモア 1995）。

あると主張することにより、自らを「高齢者」グループから分離しようとする人がいる。これは社会的において「下位」であるとされるグループのメンバーが、個人的に「優位」グループに所属しようとする「同化」(assimilation) の一種に他ならない (Tajfel 1981)。また逆に「もう年だから」と自らの衰えを「高齢者」の属性に一般化する人もいる。一方、より若い他世代は、高齢者を自分たちとは異なった特性を有する、ある特定のグループに属すると認識し、文化を異にしていると考えている。このような点から「高齢者」はエスニックグループや社会階層グループほど他のグループとの明確な差異はないものの、「女性」と同様に極めて特殊な社会グループと言えるだろう (Coates 1986)。

そこで本稿においては、高齢者を一つの社会グループであると位置づけ、彼らの同世代同士のコミュニケーションを分析し、他世代と識別できるようなコミュニケーション上の特性や「グループアイデンティティー」[5] を有するのかどうかを明らかにしていくことにする。

2．2　データと分析方法

本稿においては、高齢女性を分析対象とした。インフォーマントを女性に限定したのは、いまや日本女性の4人に1人が高齢者になりつつあり、近い将来、女性が高齢社会の重要な担い手となることが予想されるからである。また女性であれば、梅本 (2000) において研究対象とした女子中学生や成人女性のコミュニケーションスタイルと比較検討し、その特徴を明らかにすることができると考えたためである。

データ収集に協力してくださった高齢女性は、関西在住で70代から80代の方である。話された内容を録音するという実験的な設定ではあるものの、より自然に近い会話データを得るために、日頃から親しい付き合いのある友人を会話のパートナーとして選び、ペアになって、旅行、健康、趣味、家族といった日常的なテーマから自由に話してもらうことにした。データ収集は2007年9月、筆者の自宅あるいは高齢者のサークル活動の場で行い、ICボイスレコーダーで録音している。

会話データは文字化[6] し、相互行為の社会言語学の枠組みに従って質的に分析した。この枠組みは、相互行為の参与者の文化的、社会的背景や、その相互行為が行われている文脈をも考慮して、参与者同士、また参与者とその発話をめぐる関係を明らかにしようとするものである。本研究では参与者が、どのような会話スタイルをとって相互行為を行い、また高齢者としてのグループアイデンティティーをどのように位置付け、そし

---

[5] de Fina (2006) による。これについては3.3で述べる。

[6] 文字化のルールは以下の通り。//:発話の重なり　?:上昇イントネーション　。:下降イントネーション：｛｝：非言語情報　、:ごく短い間　アンダーライン/→:議論の中心となる発話や語句。「　」：直接話法　プライバシー保護のため、人名はイニシャルにした。

て相手に伝えているのかを分析していくことにする。そのためには、この枠組みの重要な概念である「産出フォーマット」[7] や「文脈化の手がかり」[8] が有効であると思われる。

3　分析と考察

3．1　繰り返し・協同して構成される発話

Coates (1996) はイギリスの成人女性の会話データを分析し、女性が友人同士の会話において「協同して構成される発話」や「オーバーラップするスピーチ」を多く用いて「協力的なフロア」を作り上げ、会話を通じて互いの「関わりあい」[9] (Tannen 1989) を強めていることを明らかにした。Coates (1996) は、女性のこのような会話スタイルを協力的な会話スタイルのモデルであると考え、将来における人間関係のあり方を示すモデルとなると主張している (286)。しかし梅本 (2000) のデータからは、成人女性のみならず、女子中学生、男子中学生の会話においても、Coates の研究と同様の協力的な会話スタイルが確認された。つまりこれらは、日本においては友人同士の会話に共通して見られる特徴であると考えられる。

それでは、本研究の対象となる高齢女性の友人同士の会話においては、このような特徴が見られるのだろうか。以下の会話データを検証していくことにする。これは長年糖尿病を持病に持つＹが自らの養生法について語り、それにＫが応じている場面である。

［抜粋１］Ｙの養生法について

056Y：まああの悪い数字じゃなしに、あのー正常ー正常とはいかないわね//病名持ってるからね。

057K：　　//うんうんうん。

058K：うんうんうん。

059Y：そやけど//

→060K：　　//一病息災という言葉がありますけど//それがもう<u>頭のとこの隅っこに置いといたら</u>//長生きできると//わたしは思っているんですけど。

---

[7] 産出フォーマット：話し手は発声体としてのアニメーター、その発話によって表現される感情、及び言葉を選択する人物であるオーサー、その話された内容によって自らの立場が確立される人物であるプリンシパルの３つのカテゴリーに分類される。さらにその話題に上る人物はフィギュアと定義される (Goffman 1981)。

[8]「文脈上の前提を伝えるために貢献するあらゆる言語形式上の特徴」(Gumperz1982:131) 但しこれには統語的、意味論的特徴ばかりではなく、パラ言語的特徴、及び非言語情報も含まれる。

[9]「個人が自分を他の人々と結びつけると感じられるような、内面的で感情的な関連」(Tannen 1989:12)

061Y：　　//そうです、そうです
062Y：　　//そう
063Y：　　//そう
→064Y：そーあのいつもいつもあの頭の隅においてます//そういうことは。
065K：　　//ねえ、そうねえ。
→066Y：あのーカロリー計算しながら頂いたり
067K：//そうそうそう
068Y：//ねえ
→069K：塩分控えたり//ねえ
→070Y：　　//そうです、もうねえ、やっぱり年いってきたら//油もんとあんまり甘いもんと
071K：　　//そうそう。
072Y：// {笑}
073K：// {笑}

Yは持病があるため、定期検査の数値が必ずしも正常範囲内ではないと056Yで述べている。しかしYの発話意図は、自分の病気を気に病んでいることをKに伝えるものではない。続くYの「そやけど」(059Y) を「文脈化の手がかり」として、これからYが言おうとしていることを理解したKは、その主張を「一病息災という考え方をいつも念頭において暮らせば長生きできると思う」と代弁する。この発話のアニメーター、およびオーサーはもちろんK自身であるが、そのプリンシパルはKとYが共に担っていると考えられる。この主張が、Yがまさにこれから Kに伝えようとしていたことであることは、Kの発話を支持して何度も繰り返されるYの相づちから明らかである。そしてさらにYは、Kが用いた「頭の隅に置いておく」という表現を繰り返すことによって積極的にKの発言を支持していることを示している。Tannen (1989:52) によれば、会話の参与者は他の参与者が発した語、句、文を繰り返すことによって、会話を共に作り上げ、相手の発話への反応を示し、自らが積極的に会話に参与している証を相手に与えている。つまり「繰り返し」は相手への関わりあいのメタメッセージを送るものであるという。

このデータにおいても、064Yに見られる「繰り返し」は、Yの意図したとおりにKに受け入れられ、その後に続く会話において、KがYと共に発話を作り上げていく様子が見られる。続く066Yでは、一病息災を念頭に置いたライフスタイルの具体例として、「食事のカロリー計算」が紹介されているが、この発話は未完成の形をとっている。

これはＫによって発話が遮られたからではなく、Ｙが予め、Ｋと協同して発話を作り上げようと意図したためである。Ｙのこの意図はＫに適切に受け取られ、Ｋは「塩分を控えたり」と、Ｙの発話を続ける。２人は互いの発話を支持していることを伝えるために、「そうそう」といった相づちや相手に働きかけをするような「ねえ」という語尾を用いている。そしてさらにＹは「油物や甘いものを控える」という発話をやはり未完成な形で終わらせている。しかしＫは「あんまり」という表現でＹの発話意図を理解し、「そうそう」と相づちを打っている。この会話で２人はアニメーター、オーサー、プリンシパルという発話に対する立場を分担し合い、協同して「長生きのためには一病息災を念頭において食事はカロリー計算をし、塩分を控え、油物や甘いものをあまり取らないのがいい」という発話を完成させているのである。その後に続く笑いが２人が一連の会話の流れの中で互いの関わりあいを強めることに成功したことを示している。

このように高齢者同士の会話においても、参与者が繰り返し、同時発話、オーバーラップ、協同して構成される発話などのストラテジーを用いて、協力的に会話に関わっていこうとする様子が見られた。少なくともこのデータからは、高齢者が相手への配慮をせずに、小野田（2007）が主張するような、一方的に１人だけがフロアを取って話し続けるスタイルは見受けられない。

３．２　協力して適切な表現を見つける例

前節においては、高齢女性が他世代の友人同士の会話に見られると同様のストラテジーを用いることによって、互いの関わりあいを深めていることがわかった。次に本節では、参与者が適切な表現を見つけられずにいる時に、他の参与者と協力しあって表現を見つけていく例を見ていく。

［抜粋２］Ｋの健康の秘訣

→103K：いやそやけどーー私もお姑さんにずっと仕えていたけどー今眠たいときはテレビ見ながら寝てると、<u>それがあたしひとつの</u>//

→104Y：　　//<u>回復力？</u>

→105K：<u>うーん、だと思ってますわ</u>。

Ｙの健康法について聞いたＫは、それに続けて、眠いときは我慢せずに居眠りをするのが、自分にとっての１つの健康の秘訣だと述べようとする。しかし適切な表現が咄嗟に見つからずに103Kの発話は未完成なまま、中断してしまう。この発話の中断を文脈化の手がかりとして、Ｋが適切な表現が見つからずに自分に助けを求めていることを

理解したYは、「回復力？」と助け舟を出して発話を完成させる。この発話のアニメーターであり、オーサーであるのはもちろんYであるが、本来のプリンシパルであるKを代弁しての発言である。この発話が上昇イントネーションであるのは、Y自身がこの表現が適切かどうか、あるいはKが言いたい表現であるのかどうかの確信が持てなかったためであろう。

Kが必ずしもこの「回復力」という表現を適切であると考えていないのは、続く105Kの「うーん」という考え込むような反応からわかる。しかし自分の発話意図が十分にYに伝わっていることを理解したKは、そのままYが提供した表現を受け入れて、「だと思っています」と自らの発話を完成させるのである。

高齢女性の友人同士会話と他世代のそれを比較した場合の相違点はここにあると言えるだろう。例えば中学生同士の会話の場合は、参与者が言葉に詰まったり、言い間違ったりした場合は、それを聞き流さずに、そのまま言葉遊びに移行していく場合が多い。梅本（2000）では時計に関する話題から時計の音マネが始まり、その言い間違いが言葉遊びに発展していく例が見られた。また成人女性のデータにおいても、ある参与者が提供した「彼女は繊細な性格だ」という話題から、「先妻の子だから」という言葉遊び（しゃれ）に移行していく例が見られた。

一方本研究のインフォーマントの場合は、話し手は相手に自分の発話意図が伝わっていることがわかれば、それ以上に厳密な表現を見つけようとはせず、またある特定の表現にこだわって、会話が発展していくこともなかった。高齢者の会話は、他世代以上にコンテクストに依存していると言えるかもしれない。以下はさらに顕著な例である。

［抜粋３］済州島旅行について

→239Y：済州島いうてどういう風な感じ？

→240G：あのただもう、韓国の//あれやからね。

241Y：　　//ふん

242Y：ふん

243G：九州からね、//５時間ぐらいで行けたと思いますわ。

244Y：　　//ふん

245Y：ああそうー。

友人と済州島に旅行したというGに、Yは質問をする。それに対する答えが240Gの「韓国のあれ」である。この表現では、およそYには適切な情報が伝えられたとは思えない。しかしこれに対してYは、短く相づちを打って次のGの発話を促している。こ

の抜粋に後続する部分で、Gはいろいろな済州島でのエピソードを披露し、Yにその様子を伝えている。おそらくYはGから済州島に関する簡潔で的確な情報を求めていたわけではないのだろう。それは239Yの「どういう風な感じ」というあいまいな表現にも表れている。具体的な場所や、位置づけについて知りたいと思ったのであれば、より正確にその意図を伝える表現が選ばれただろう。YはGに情報の提供を求めたわけではなく、Gとの楽しい語らいを通して互いの親密度を高めようとする「ラポール・トーク」[10] (Tannen 1990) を行おうとしているのである。これについてはGも同様で、この後の部分で、済州島に関する適切な情報を与えるというより自分たちの旅行での愉快なエピソードを紹介することによって会話を盛り上げようとしている。

遠藤（1993）は、ラジオ・テレビ番組に出演した高齢者の談話を分析し、その話し方や使用されている語種、語彙、また音声面での特徴を明らかにした。その結果、いいよどみや指示語の多用、短い言い切りの応答、音の脱落や鼻音・破裂音の「ナ・ダ・デ」が弾き音の「ラ・レ」に変化している例が見られることなどを指摘している。しかし遠藤（2000）においては、あるパーティーでのスピーチを比較して、いいよどみやスピードなど、高齢者とそれより若い世代の話し方に顕著な違いが見られなかったと報告している。

本研究のデータにおいても、いいよどみ、言い直し、指示語の多用などは確認された。しかしそれに対して、参与者はそれほど理解の困難を感じていないようであった。話し手が適切な表現を求めて相手に問いかけるような様子が見られた場合には、協同して適切な表現を探すものの、それ以外の場合には話し手にさらなる発話を促して、より大きなコンテクストの中で話し手の発話意図を理解しようとする態度が見られた。このような会話スタイルが会話の参与者によって共有されているために、各々の発話における聞き取りや理解が難しい語彙や表現などに戸惑って流れが妨げられることがなく、双方がスムーズに会話を続けていけるのである。これは、高齢者が加齢による身体的変化から生じるコミュニケーション上の障害にうまく適応している証であり、そのコミュニケーション能力の高さを示す一例であると考えられるだろう。

3．3　「グループアイデンティティー」の共有

Tajfel (1981:255) によれば、「社会的アイデンティティーとは、自分がある社会グループのメンバーであるという認識から生じる個人的な自己概念の一部であり、そのグルー

---

[10] Tannen (1990) は男性に典型的な、情報の交換を重視する会話スタイルを「リポート・トーク」と名づけ、情報の交換よりも互いの親密度を高めることを主たる目的とする女性の友人同士の会話に特徴的なスタイルを「ラポール・トーク」と呼ぶ。

プのメンバーであるという価値観や感情的な重要性と結びついているもの」であるという。しかしこれに対して de Fina (2006) は、あるグループのメンバーであるという意識は時間的にもまた地域によっても連続的に変化し、また集団レベルでのアイデンティティーばかりではなく、個人としてのアイデンティティーも表現されるとする。また１人の人間が、同時に複数の社会グループに所属するという意識を持つ場合もあるだろう。

本節においては「高齢者」と「女性」という２つの社会グループに属するインフォーマントが、その会話において、どのように「グループアイデンティティー」を表現し、メンバー間の関わりあいを強めているかに注目してみる。

以下のデータを見てみよう。ここでは G は自分がこれまで習っていたお稽古事（書道）について Y に語っている。

［抜粋４］G のお稽古事（習字）について

123G：で、先生「ここで書きなさい」言わはるねんけど、//それで楷書行書細字//ペン字//実用書、んで仮名//それでからあの一今までの自分で詩を書いて、その字をね、//「仮名のようにしてちょっと太いめの変わった字を書いてきなさい」言うて七種目書いていくねんね。

124Y：　　//うんうん

125Y：//ペン字

126Y：　　//はいはい

127Y：　　//ふん

128Y：　　//ふん

→129G：それが書かれへんのよ、<u>もう自分も年やからね。</u>

（中略）

165G：そんなんでそれでもう多芸なことはもうー浅く//広くやからもー//

166Y：　　//広く？

167Y：　　//いつも言われるもんねえ。

168Y：｛笑｝

169G：いつも言われるねんもん、もー。

170Y：そやけどそれの方がいいのん違います？

171G：いやーもう//

→172Y：　　<u>//根気がないから。</u>

173G：｛笑｝

→174Y：ね、年いってきたら根気がないもんね。
175Y：そやから浅く広くの方が私はいいと思う。

129Gで、Gは自分がもう年をとってきたために書道の先生が出した課題を全てこなすことができないと語っている。そして、いろんなお稽古事が長続きしないとも述べている。それに対してYは「もう、根気がないから」と応じる。Yのこの発話によって、フレーム[11]が「自分に対するからかいのフレーム」に変化したと解釈したGは笑う。

しかしYは、あれやこれやといろんなお稽古事をするGに対して「根気がない」と評したわけではない。Gの笑いを文脈化の手がかりとして、自分の発話意図が正確に理解されなかったと判断したYは、174Yで「年をとったら根気がなくなる」という表現で、自分が「根気がない」ことをGの欠点であると批判したわけではなく、高齢者の属性であると考えていることを、より明確に言い直している。つまりYは、自分自身もGも共に「高齢者」というカテゴリーに入ると考えており、そのグループのメンバーは共通して「根気がない」という特性を持つと考えているのである。しかもYは、加齢によるこのような変化を決して否定的には捉えていない。Gが何にでも「広く浅く」興味を持つことを評価し、170Yで「その方がいい」と述べている。そしてその根拠を、「広く浅く何でもする方が年をとって根気がなくなってきた自分たちには合っている」と174Y、175Yで説明している。

「年をとる」、そして「根気がない」という、一般的には否定的なニュアンスで語られる表現を、Yが決して否定的に使っていないのは興味深いことである。これはYの自己評価が肯定的であると同時に、同じ「高齢者」というカテゴリーのメンバーをも肯定的に受け入れていることの表れであると考えられる。

このデータにおいては、「高齢者」というカテゴリーが、会話の参与者同士が同じグループに属し、同じグループアイデンティティーを持つという主張を補強し、メンバーの距離を縮めるために使われている。しかもこのカテゴリーは、参与者によって、一般的に考えられているような否定的な捉えられ方をしていない。さらに「根気がない」という属性も、Yは否定することなく受け入れ、むしろ積極的にこの変化に適応していくという生き方を選択しようとしている。

このように、Gの「自分は広く浅く何にでも興味を持つためにお稽古事が長続きしない」という主張を、Yは「根気がない」という特性を持つ「高齢者」に共通するものであると解釈し直し、単にG１人の問題ではなく、自分たち全てに通じることであると

[11] フレームとは、日々の相互作用において、人々が「今ここで何が行われているのか」を正しく解釈するための枠組みである（Bateson 1972/Goffman 1981）。

主張することによって、２人の関わりあいを強めることに成功している。

次の抜粋を検討してみることにする。これは、3.1 節の［抜粋１］に連続する部分である。持病（糖尿病）を持つＹが、自分の健康法（食事法や心構え）について語り、それについてＫが「まあ適度に運動やね」と締めくくっている部分である。

［抜粋５］Ｋの健康の秘訣・夫の入院時のエピソード

074K：まあ適度に運動やね。
075Y：そうです。
→076Y：けども一奥さんも私もよく動くから//
077K：　　//そうそうほんと、その点//は
078Y：　　//もう足がふらふらなるまで。
079K：そう。
→080K：ま、昔の人間だから//
081Y：　　//そうそう、そうです。
→082K：ねえ、今の人と違って//
083Y：　　//そう、そうねえ。
084Y：座ることなしに//動くもんねえ。
085K：　　//そうそう。
086Y：それがいいのと違いますか
087K：そうです、はい。
089Y：ねえ。

（中略）

262K：でやっぱ頼むのも、私がどっか行くときは//ちょっと娘を呼んで、//で主人//の病院に行ってもらったんだけども//主人は私が来ると、私は俳句で行って//お休みやからっていうて娘を呼んでるんだけど、//主人は「いや、買い物ちゃんと頼んだから来るに決まってる」
263Y：　　//ふん
264Y：　　//ふん
265Y：　//ふん
266Y：　　//ふん
267Y：　　//うん
268Y：　　//ふん

269Y：ああ奥さんを待ってはるわけね//病気して病院で寝てはったら一日長いからね

270K：　　//待ってるとそんで

271K：そうらしいです。

272K：そやから私毎日してますわ。

273K：で行かなかったら日誌に書いてます//手帳に。

274Y：　　// {笑}

275Y：{笑}

（中略）

286K：まあ10日ほどでしたけどね//まあそんなふうで。

287Y：　　//ふんふんふん

→288K：やっぱ昔の人間ていうのはね、やっぱーどう言ってええのかな、まあそれだけ信用されてるのかもしれないけど。

289Y：頼ってはんのよ奥さんを。

290K：いやいや。

291Y：いやほんとよね。

292K：いやなんにもできへんけどね。

健康を保つためには、食事療法に加えて運動も必要であるというKに対して、Yは自分自身もKもよく日頃から体をよく動かす方であると答えている。そしてそれに同意したKは、その根拠を「（2人とも）昔の人間だから」であるとしている。さらに「今の人」と対比し、その違いを明らかにしている。ここでKは、自分とYを、共に「昔の人間」というカテゴリーに属すと考えており、「昔の人間」は、それと対比される「今の人」とは異なり、体を動かすことを厭わないと暗に伝えている。Kのこの主張をYも支持し、「それがいいのと違いますか」と評価を与えている。

Yの「奥さんも私もよく動く」という発言に対してKが「確かに自分もYも性格的にまめに動く方である」と解釈してもかまわないはずである。しかしKは、「よく動く」という属性を「昔の人間」が共通して持つものであるとみなし、そのグループに属するYも自分も、共にこの属性を持つと判断しているのである。

Kの「昔の人間」というカテゴリーは、後半の、夫が入院した際のエピソードにも出てくる。Kの夫は、Kが毎日病院に見舞いに来るのを待っていた。しかしKは、用事がある時には娘に代わりに病院に行ってもらうことがあったという。これに対して夫は、用事があって来られない母の代わりに来たという娘に対して、自分は妻に買い物を頼ん

だのだから、妻はその約束を守って必ず見舞いに来る、と反論する。Kはこのような夫の態度に困った様子を見せながらも、自分が「昔の人間」だから夫に信用されているのではないか、と推測している。つまりKの夫とKは、共に「昔の人間」というカテゴリーに入り、そのグループ内では、「約束事はきちんと守る」というルールが共有されていると考えているのである。これに対してYは、異なった解釈をしている。Kとその夫、娘を、「妻」と「夫」、「娘」を含む「家族」というカテゴリーに入れ、Kの夫が「娘」の見舞いでは満足できず、「妻」であるKを頼って、その見舞いを心待ちにしていると推測している。おそらくは、K自身もYの解釈を正しいとは思っているのだろうが、てらいもあってか、290Kでその発話を否定している。

このデータに見られる「昔の人間」とは、単に高齢であるばかりではなく、おそらくは戦中、戦後の苦しい時代を共有した同時代の人間として規定されていると考えられる。そしてこの会話の参与者には、こうした時代を経た「昔の人間」は、「今の人」と異なって「よく体を動かし」、「約束を守る」と考えられている。そしてこのような特性が、同じカテゴリーに属するメンバーに受け入れられるという前提のもとで、参与者は互いに詳しい説明もなしに「昔の人間だから」という表現を用いるのである。

そしてこのようなカテゴリーの属性が説明もなしに受け入れられるということは、とりもなおさず、彼女たちが互いにグループアイデンティティーを共有している証になるだろう。病気に対する対処法や夫の入院の際のエピソードは、各々の個人的な話題として語られたものである。しかしこの話題を語るに当たって、2人は「昔の人間」というカテゴリーを使用している。ここでは、この「昔の人間」というカテゴリーは一種の「仲間言葉」と同じように機能し、互いの関わりあいを強めることに役立っているのである。そしてこの互いの関わりあいの強さが、「持病」や「夫の入院」と行ったデリケートな話題を語る際の抵抗をなくす手助けとなっている。このようなカテゴリーについての言及は他世代のデータからは見られず、高齢者のデータに特有のものであった。

4　まとめ

一般的に現代日本においては、「年をとること」、あるいは「高齢者」の持つイメージは否定的に捉えられている。そして最近では、「アクティブエイジング」や「サクセスフルエイジング」といった考え方が浸透しつつあり、いつまでも若い頃と変わらず、元気で活動的な高齢者が評価される時代にもなってきている。

しかし今回紹介したデータからは、高齢者自身が自分たちの日常や在りようを否定的に捉えている様子は窺えなかった。だからといって、本研究のインフォーマントは年をとることに抗い、いつまでも現役として若者に伍して社会の中で活動的に生きていこう

と考えているわけでもない。加齢による変化をありのままに受け入れ、それを自分たち「高齢者グループ」に共通する特性と考えて適応していこうとする態度が見える。

そしてこのような姿勢が同世代の友人とのコミュニケーションの場においても表れている。これまでの先行研究は、高齢者の話し方に対して「冗長でいつまでも肝心なことが出てこない」（外山 1999）とか、「一方的に同じ話を繰り返す」（小野田 2007）という否定的な見方をしてきた。しかし本研究の会話データからは、時には他世代とは異なったスタイルで、またある面においては同様のスタイルで、参与者同士が互いに協同して会話を作り上げ、関わりあいを強めていることが明らかになった。このように、実際の高齢者同士の会話データを検証することによって、加齢による身体的な衰えがコミュニケーションに及ぼす影響ばかりを焦点にしてきたこれまでの研究では明らかにされなかった高齢者のコミュニケーションの一面を浮き彫りにすることができた。今後は、高齢者と他世代との会話や男性高齢者の会話データも分析することによって、より詳細に高齢者のコミュニケーションの特性を明らかにしていく必要があるだろう。

参考文献

Bateson, G.1972. A Theory of Play and Fantasy. In *Steps to an Ecology of Mind*. New York: Ballantine Books. 177-193.

Coates, J. 1986. *Women, Men and Language*. London: Longman.

————.1996.*Women Talk*. Oxford: Blackwell.

Coupland, N., J. Coupland and H. Giles. 1991. *Language, Society and the Elderly*. Oxford: Blackwell.

de Fina, A. 2006. Group identity, narrative and self-representations. In de Fina, A., D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.)

de Fina, A., D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.). 2006. *Discourse and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

ディヒトバルト, ケン（著）. 田名部昭・田辺ナナ子（訳）1992.『エイジ・ウェーブ』創知社.

遠藤織枝. 1993.「「老人語」の特徴」『日本語学』Vol.12, No.4. 75-85.

————. 2000.「高齢者の話し方は遅くてわかりにくいか」『ことば』Vol.20, 83-94.

藤田綾子. 2000.『高齢者と適応』ナカニシヤ出版.

Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Gumperz, J.J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

小野田貴夫 2007.「高齢者の話す内容・話し方の特徴について」社会言語科学会第 19 回

大会発表論文集. 62-65.

パルモア, E.B.（著）. 奥山正司・秋葉聰・片多順・松村直道（訳）. 1995.『エイジズム』法政大学出版局.

Ryan, E. B., Hummert, M. L. &Boich, L. H. 1995. Communication predicaments of aging. *Journal of Language and Social Psychology*, Vol.14. Nos.1-2. 144-166.

Tajfel, H. 1981. *Human Groups and Social Categories*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tannen, D. 1989. *Talking Voices*.Cambridge: Cambridge University Press.

————. 1990. *You Just Don't Understand*. New York: Ballantine Books.

辰巳格. 1997.「加齢現象としての喚語困難」『言語』Vol.26, No.13［315］26-37.

外山茂比古. 1999.「現代社会とことばのスピード」『言語』Vol.28, No.9.［336］24-29.

梅本仁美. 2000.『関西在住女子中学生間の会話スタイルに関する一考察』大阪大学大学院言語文化研究科修士学位論文.

宇佐美まゆみ. 1997.「高齢化社会のコミュニケーション環境整備のために」『言語』Vol.26, No.13［315］60-67.